

ベトナムの考古文化(2)

——後期旧石器時代——

訳・解説 菊池 誠 一

はじめに

本稿は、ハノイ国家大学人文社会科学大学歴史学科の教科書であるベトナム語本 *CO SO KHAO CO HOC* (2008) (『考古学の基礎』) の翻訳である。本誌 No. 828 に掲載された「ベトナムの考古文化(1)」のつづきで、下記の第2部第1章2-2. にあたり、後期旧石器時代をあつかう。

- 第2部 第1章2-1. 前期旧石器時代 (グエン・カック・スウ著)
 - 同2-2. 後期旧石器時代 (グエン・カック・スウ著)
 - 同3-2. ベトナムの新石器時代 (ハン・ヴァン・カン著)
- 第2部 第2章2-1. ベトナム北部の青銅器時代 (ラム・ティ・ミィ・ズン著)
 - 同2-2. ベトナム中部の青銅器時代 (ラム・ティ・ミィ・ズン著)
 - 同2-3. ベトナム南部の青銅器時代 (ラム・ティ・ミィ・ズン著)
- 第2部 第3章2-1. ベトナムのドンソン文化 (ホアン・ヴァン・コアン著)
 - 同2-2. ベトナムのサーフィン文化 (ホアン・ヴァン・コアン／
ラム・ティ・ミィ・ズン著)
 - 同2-3. ベトナム南部の初期鉄器文化 (ホアン・ヴァン・コアン著)
- 第2部 第4章 ベトナムの歴史考古学
(グエン・チュ／ホアン・ヴァン・コアン／グエン・スオン・マイン／
ラム・ティ・ミィ・ズン／ハン・ヴァン・カン著)

なお、ベトナム語を表記するにあたって声調記号と発音記号を省略し、訳出にあたっては明らかな誤記を訂正し、意識した個所もあることをおことわりしておく。

第2部 第1章 2 ベトナムの旧石器時代

2. 後期旧石器時代

ベトナムにおける後期旧石器文化は、これまでグォム (Nguom) 剥片石器技法 [以下、グォム技法] とソンヴィー (Son Vi) 文化が認定されている (図1)。

グォム技法とは、ミエンホー (Mieng Ho) 洞穴とグォム岩陰 (下層)、それにタイグエンのタンサ

ー (Than Sa) 溪谷で確認された剥片石器を特徴とした製作技術のことである (図2)。

ミエンホー洞穴は1972年に、グォム岩陰は1981～82年に発掘調査された。これまでグォム技法の内容・年代・起源、そして発展段階について研究されてきた。

グォム岩陰遺跡の地層には3つの文化層が認められる。最下層は第I文化層に相当し、深さ1.20～1.45 mであり、淡い黄色の砂混じりの粘土で石灰岩片や石器、半化石化した動物歯骨を若干含み、たいへん少ないが貝殻もみられる。主要な道具は剥片で作られた尖頭器、ナイフ、スクレイパーであり、ほかに石核から作られた石器も少しみられる。注目すべきことは、この層で更新世後期の特徴をもつオランウータンの下顎の4本の歯と花粉もみつかったことである。I層とII層の境の層から採取した炭化物の ^{14}C 年代測定法では $23,000 \pm 200 \text{ BP}$ と $23,100 \pm 300 \text{ BP}$ である。そのため、最下層の年代はおそらく $23,000 \text{ BP}$ よりも古く、今から40,000年前であろう。

中間層は第II文化層に相当し、深さ0.40～1.20 mであり、破碎された柔らかな石灰岩片が混ざる粘土であり、淡黄色をしている。動物歯骨はあまり化石化しておらず、この層中からオランウータンの1点の下顎が出土し、陸生・淡水の貝殻も多くみられる。下層の文化層のように剥片石器がある一方、この文化層ではI層よりも石核石器の占める割合が増している。年代は、 $23,000 \text{ BP}$ から $19,000 \text{ BP}$ の間であろう。

上層は第III文化層に相当し、厚さが60 cmほどである。濃い黄色の石灰岩片混じりの粘土からなる。下層よりも貝殻を多く含み、動物骨は化石化しておらず、石核石器を多く含み、そのなかにはホアビン型の石器やバクソン型の刃部磨製石器もみられる。60 cmほどの深さの ^{14}C 年代測定では、 $19,040 \pm 400 \text{ BP}$ と $18,600 \pm 200 \text{ BP}$ である。

グォム岩陰遺跡のトレンチから23,044点の石器類、とくに石核石器や剥片石器、剥片、石核などが出土した。そのなかで、剥片石器の占める割合は43.92パーセントと多く、調整していない剥片は52.67パーセント、石核は44点と少なく、また定型的ではない石核石器が3.16パーセントである。

グォム岩陰遺跡の3つの文化層の文化的な特徴は、剥片技術の石器がみられることである。下層のそれはミエンホーの石器と類似し、おそらく初源的な剥片技術である。グォム技法は、ソンヴィー文化やホアビン文化の石器技術とは異なっている。グォム岩陰遺跡の石核石器はソンヴィー文化の石器製作技術とは異なっているが量的に少ないため、ソンヴィー文化から分離するにはまだ不十分である。グォム技法は、ソンヴィー文化の石器技術よりも古いものであろうが、後期旧石器時代に属していると考えられる。

ソンヴィー文化の最初の遺跡は、フート省ラムタオ県ソンヴィー社ヴォンソウ丘でハノイ総合大学

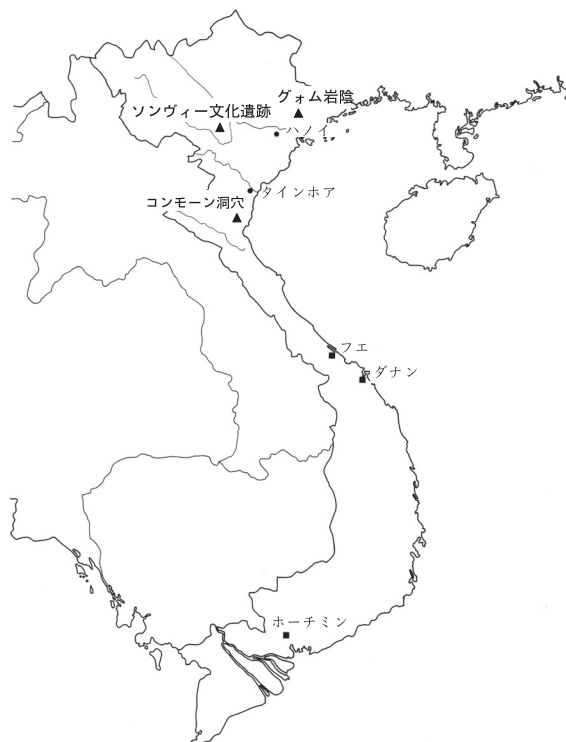
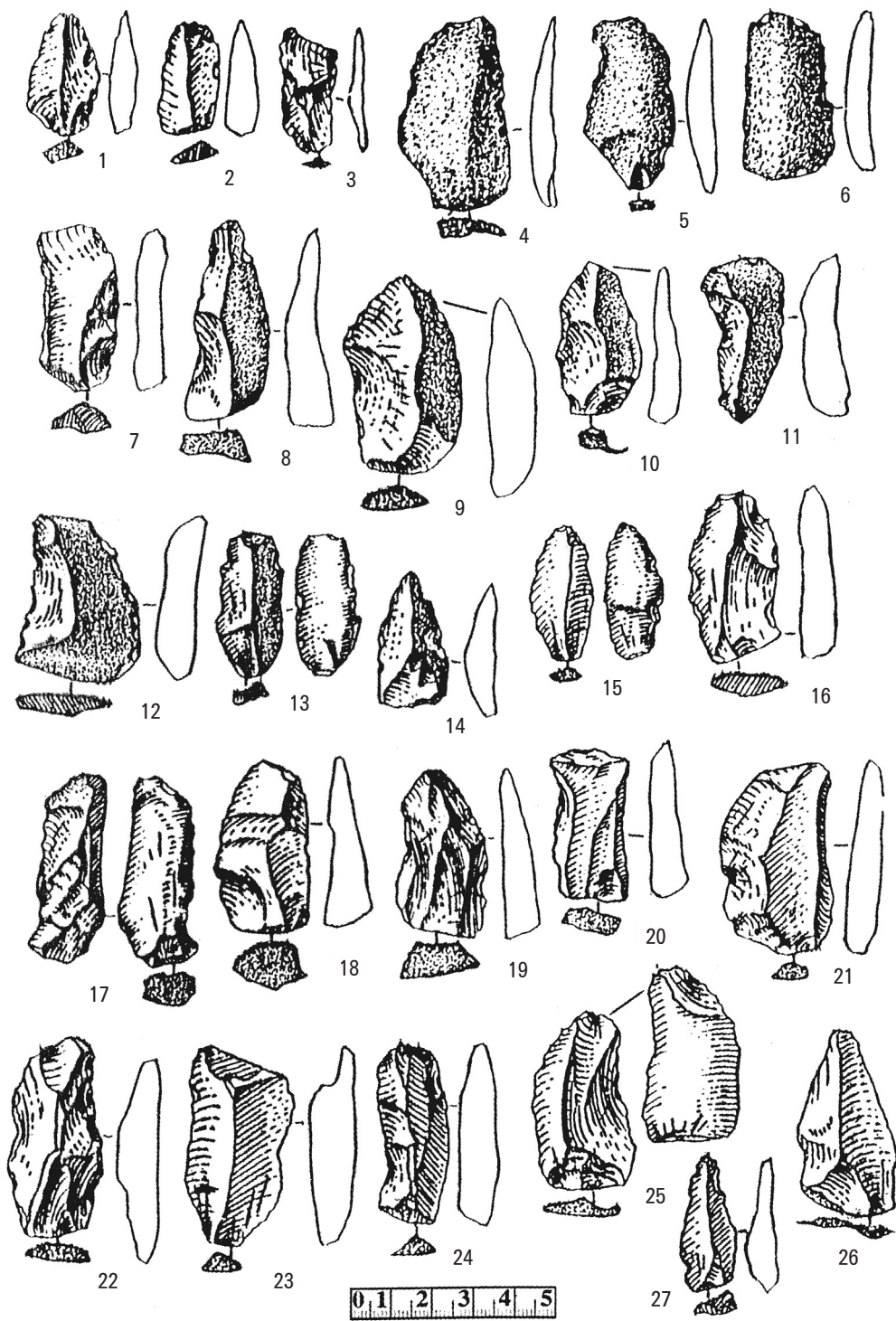


図1 ベトナムの後期旧石器時代遺跡 ▲



Bản vẽ 6: Công cụ mảnh trước kỹ nghệ Ngườm (di tích Mái đá Ngườm)
(Nguồn: Hà Văn Tấn, 1998, tr. 389)

図2 グォム技法による剥片石器

史学科の教員と学生が1968年に発見した。

これまでベトナムにおけるソンヴィー文化の遺跡は140地点以上が確認されている。人骨や動物骨が出土した洞穴遺跡も若干あるが、大多数は動物骨などを伴わない野外遺跡である。ソンヴィー文化

遺跡の発掘調査は多くはないが、得られた資料は豊富で多様であり、系統的に研究されてきた。

ソンヴィー文化遺跡の分布範囲は広く、最北の遺跡はハジャン省のドイトン (Doi Thong) 遺跡で、西端はライチャウ省ドイカオ (Doi Cao) 遺跡、東端はバクジャン省アンチャウ (An Cau) 遺跡、南端はクアンチ省クア (Cua) 遺跡である。遺跡はフート省の高原地帯に密集している。

ソンヴィー文化遺跡は2種類の地形上に分布している。丘陵上と河川流域の洞穴・岩陰である。洞穴・岩陰遺跡は15遺跡と少なく、ソンラー省、ホアビン省、そしてタインホア省のホアビン文化分布域と重なる。そのなかには文化層を通してみたソンヴィー文化とホアビン文化の関係を理解するうえで重要な遺跡がある。ソンヴィー文化遺跡の90パーセント近くが開地遺跡である。そのうちの6遺跡がダー川流域にあり、文化層をもつが（しかし、新しい時代の遺物も混在）、動物骨はない。そのほかは文化層がなく、地表上に遺物がみられる遺跡である。

ソンヴィー文化遺跡は総じて大河川流域の中流地帯に分布する。ロ川、ホン川、ダー川、ルックナム川、マー川、ヒュ川であり、そのなかでホン川の中流域（イエンバイ省、フート省、ハタイ省）がもっとも多く、110遺跡が分布している。この地はベトナム北部の典型的な高原地帯であり、丘陵が連なり、頂部は平坦で裾は浸食が激しく、谷間は狭い。

総括すると、ソンヴィー文化の遺跡は広域に分布し、2種類の遺跡がある。洞穴・岩陰遺跡（ホアビン文化と重なる）と河川流域の丘陵上（わが国の別の石器時代遺跡の分布域と異なる）の開地遺跡である。大河川の中流域の丘陵は、ソンヴィー文化遺跡の集中する分布域であり、そのなかでホン川地域は卓越している。おそらくソンヴィー文化人の主体的な生活圏であろう。

若干のソンヴィー文化遺跡から得られた10,927点の遺物を観察すると、剥片がもっとも多く（60.46パーセント）、剥片石器は少ない（1.06パーセント）。

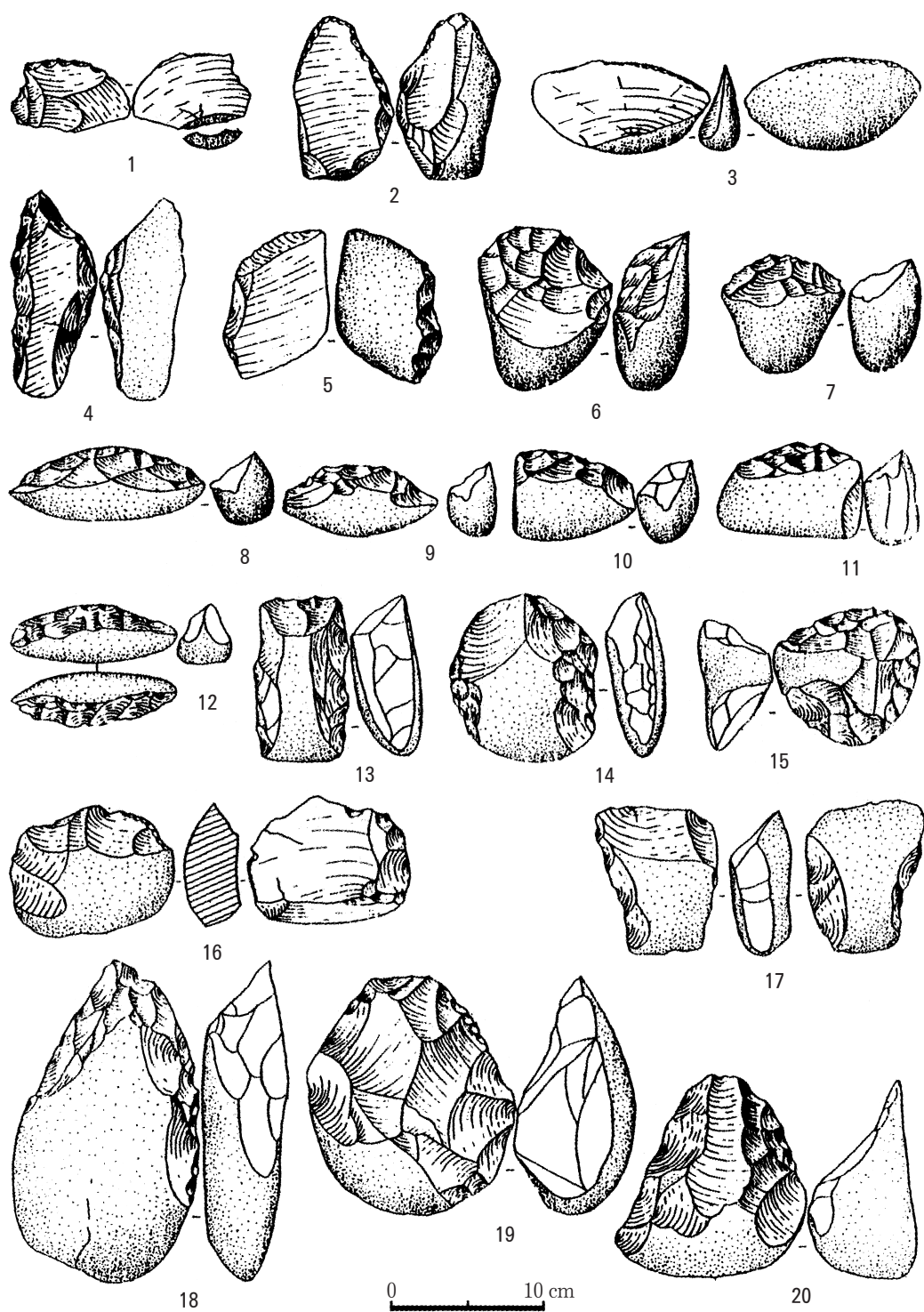
ソンヴィー文化の石器は河川礫が主要であり、ホン川やダー川の上流域では、礫は大きく平らであり、中流のそれは小さいが厚い。バクザン地域の礫は角があり、ゲアン地域のそれは小さく角があり、厚い。石材は、珪岩（ゲアン省ランヴァク遺跡 (Lang Vac) のように石英の場合もある）や玄武岩、流紋岩（ホアビン省やタインホア省の若干の洞穴遺跡）が多い。

主な石器製作技術は打割であり、あまり調整はされておらず、磨製技術はない。目立つ技術は片面加工で自然面を残している。両面加工のもの、あるいは片面のほとんどを加工しているものも若干ある。対向剥離と礫を横に切断したものもソンヴィー文化の遺物にみられる。幾何学形の石核から剥片を剥離する技術を欠き、剥片加工技術は発展しなかったのが特徴である（図3）。

礫器は多くみられ、豊富である。形態によって、エンドチョッパー、サイドチョッパー、ポイント、チョッピングツール、ユニフェイスなどがある。

貝殻は多くはなく、主要なものは山に棲息する貝であり、森に棲息する貝は少ない。これらは割られ、焼かれて炭化している。山の貝は、淡水貝などと一緒に出土することがある。これらの貝は石灰岩山やその付近の湿潤な熱帯地域に棲息しており、ホアビン文化段階のそれと比べると種類は多くない。現在でも、この地域に住む人びとはこのような貝を採り食用としている。おそらく先史時代人にとって重要な食料資源だったのであろう。

動物骨は量的には少なく、同種類のものが多く、化石化はほとんどみられない。通常は、碎かれ、あるいは煤のような付着がみられ、小動物の骨が多い。飼育された動物の骨は確認されていない。ソンヴィー文化の動物はホアビン文化と基本的に類似している。古象や野牛、サイのような希少な動物、



Bản vẽ 8: Công cụ đá cuội văn hoá Sơn Vi
1-3. Mảnh tước; 4-5. Cuội bở; 6-20. Công cụ cuội
(Nguồn: Hà Văn Tấn, 1998, tr. 390)

図3 ソンヴィー文化の石器

あるいはオランウータンやパンダのようなベトナム北部では絶滅した動物も確認されている。ソンヴィー文化の動物相は、乾燥した暑い気候から湿潤で暑い気候への変化の過渡期における狩猟活動の反映であろう。また、花粉分析から栽培植物の痕跡はない。

炉跡は赤く焼けた石、焼けた貝殻、炭化物の出土によって判明する。時には、カニの甲羅や煤の付着した石がみられる場合もある。炉は通常、円形で2～3 mの大きさで深さは20 cmほどあり、洞穴の中央や入り口付近に位置する。

墓跡はコンモーン（Con Moong）洞穴やディユ（Dieu）岩陰、ヌック（Nuoc）岩陰で検出されている（写真1～4）。墓は洞穴内に作られ、伸展葬か屈葬である。周囲に石を配し、炭化杭や貝殻、赤土がみられる場合もある。また、石器や海産貝を副葬することもある。

人骨は化石化がみえはじめ、コンモーン洞穴の人骨はオーストラロイド・ネグロイドの特徴があり、ヌック岩陰の人骨はオーストラロイドであり、まだモンゴロイドの要素がみられない。

ソンヴィー文化は二段階に区分されている。早期段階は、粗製の打割技術と片面加工の大きな礫器を主体とする。尖頭形石器や横刃石器、ユニフェイスが比較的多い。この段階の遺跡は、ソンラー省



写真1 コンモーン洞穴



写真2 コンモーン洞穴検出人骨

（写真1～4: ベトナム考古学院提供）



写真3 コンモーン洞穴出土石器



写真4 コンモーン洞穴出土石器

のバンフォー (Ban Pho), ハイラム (Hai Luom), ファロン (Hua Lon), ランカイ省のコウデン (Cau Den), コンギェップ (Cong Nghiep), ハタイ省のバントアン (Van Thang), バクザン省のチュ (Chu), ゲアン省のランヴァクである。後期段階は、小さな礫器で粗製が減じられ、打割痕が多い。ソンヴィー文化の礫器が絶対的多数を占め、尖頭形やユニフェイス、横刃石器が少なく、ホアビン文化型の石器である短斧や皿形石器がごくまれにみられることがある。

ソンヴィー文化の開始年代に関しては、現在ふたつの見解がある。ソンヴィー文化は 21,000~11,000 BP に存在したという考えと、開始時期はさらに古く 30,000~11,000 BP の間とする考えである。

コンモン洞穴の下層の ^{14}C 年代測定では、12,000~11,000 BP である。わが国の典型的なホアビン文化の若干の遺跡の ^{14}C 年代測定では、12,000~10,000 BP である。そのため、11,000 BP の段階でソンヴィー文化が終焉したと考える意見が多い。

概括すると、ソンヴィー文化はひとつの考古文化であり、30,000~11,000 BP の年代に存在し、主要な分布域は古河川沿いの高原地帯であり、粗製の礫器を使用し、東南アジアで知られている礫器技術とは異なる様相をもっている。ソンヴィー文化人は更新世末の気候環境のなかで狩猟・採集生活を営んでいた。ソンヴィー文化人は、先史時代のベトナムと東南アジアに広範囲に分布し、重要な位置を占めるホアビン文化（新石器時代前期—訳者註）の先祖である。

別の後期旧石器時代遺跡

ソンヴィー文化以外に、ベトナムの旧石器時代のなかで別系統の石器を出土する遺跡がある。それはナムツム (Nam Tum), バンフォー, ハットルオム (Hat Luong), ファロン, ドイトン遺跡である。現在、ナムツム／バンフォーをひとつのグループとする意見と、別グループとする意見がある。また、ソンヴィー文化に属するという意見もある。そのなかで、ドイトン遺跡は若干の別の要素をもつためソンヴィー文化よりも古いという意見が多い。

ナムツム遺跡はライチャウ省フォント町の西南の石灰岩山に位置し、1972 年に発見、翌年に 42 m² 発掘調査された。

洞穴は広く、入り口は西北にあり、その前面はナムツム溪流がナムペー溪流に流れ出る平坦な谷間である。周囲は疎林の石砂の丘である。この遺跡の文化層は 1.2 m の厚さがあり、4 層で 2 文化層に区分される。下層の文化層（第 3 層と第 4 層）は、旧石器時代に属し、上層の文化層（第 1 層と第 2 層）は新石器時代に属している。下層の文化層では、動物相の主要なものは現代種であり、植物花粉がみられる。

下層から 931 点の石器（708 点の剥片、6 点の石核、164 点の折断石器、47 点のスクレイパー、6 点の敲石）が出土した。ソンヴィー文化の要素をもちつつもバンフォー・ドイトン型の石器とよばれる要素もある。

バンフォー, ハットルオム, ファロン遺跡グループ

バンフォー遺跡はソンラー省イエンチャウ県タホア社を流れるダー川右岸に位置し、1974 年に発見され、翌年に 100 m² 発掘調査された。文化層は薄く、各時代の遺物が混入している。旧石器時代に属する遺物は 973 点検出され、そのなかでナムツム型の特徴をもつ遺物は 40.77 パーセントで、ソ

ンヴィー型の特徴をもつ石器は 54.35 パーセント、そして先ホアビン型の特徴をもつ石器は 4.88 パーセントを占めていた。

バンフォーと同様な性質をもつ遺跡が 1996 年はじめに古ダー川の流域で発見された。それはトンチャウ県のファロン遺跡とムンラー県のハットルオム I とハットルオム II である。石器はバンフォーと類似し、ソンヴィー型の要素をもっている。これはダー川上流域に分布する代表的な遺跡である。さらにこの遺跡は雨期に入ると洪水に見舞われる。乾期になるとダー川の川面から 2 m も満たない高さである。川の資源開拓のため大河に沿って洞穴の分布域が拡大しているのは、一般的にはわが国の旧石器時代人、個別には西北山地の旧石器時代人の自然適応の結果で、これはダー川の現象だけではなく、ホン川やロ川の上流域でもみられることであろう。

ドイトン遺跡はハザン市チャンフー坊に位置し、1987 年に発見された。遺跡はロ川とミエン川の合流するロ川沿いにあり、川面から 15 m ほどの高さで海拔約 100 m である。北の石灰岩山から南の丘陵に代わる低丘陵地帯に位置している。遺物は石器である。この丘陵地の開拓などによって 1,000 点以上の遺物が検出されている。大多数の石器は赤褐色土のなかから出土し、下層は 1~2 m の古砂礫に覆われている。この遺跡は現在までのところベトナムで地層がもっともよく残り、石器の出土量が一番多い旧石器時代の開地遺跡である。

12 点の石核石器と 139 点の剥片のほかに 687 点の粗製石器が検出されている。すべてがこの付近で採れた礫から作られた石器であり、主要な材質は砂岩、ついで珪岩や石英、まれに鉄鉱石もみられる。直接打法の技術で、片面加工である。剥片石器は少ない。石器は大きく、おそらくわが国でこれまで知られている旧石器時代の遺物のなかでもっとも大きいものであろう。

石器の種類は、尖頭形 (29.83 パーセント)、粗製の切断形 (23.61 パーセント)、スクレイパー (14.16 パーセント)、敲石 (1.01 パーセント)、斧形石器 (0.8 パーセント) である。そのうち、もっとも特徴的なのが尖頭形、刃部が狭い切断形、横刃のスクレイパーである。

ドイトンの石器はソンヴィーのそれと異なり、ソンラー省のバンフォー、ハットルオム、ファソン、ラオカイ市周辺の遺跡、そして中国湖南省の龍山綱、家荷、鉢魚山、そして万紅嶺などの遺跡と類似する要素をもっている。ドイトン遺跡はソンヴィー文化よりも古く、ソンヴィー文化の起源のひとつであろう。

(解説)

ベトナム、あるいは東南アジア大陸部における旧石器時代の石器群は、礫器が支配的である。そのなかで、1981 年~82 年に発掘調査され、礫器とともに剥片石器が出土したグォム岩陰遺跡は、東南アジアの礫器文化伝統と剥片石器文化とのかかわりを考えるうえでベトナム旧石器考古学研究に一石を投じた大きな発見となった。1978 年版の *CO SO KHAO CO HOC* は、グォム岩陰遺跡の発掘調査前のデータで執筆されているため、後期旧石器時代の剥片石器文化についての記述はほとんどない。新版ではこの部分が補訂されており、その点に特徴がみられる。

しかし、グォム岩陰遺跡出土資料について、これを検討した日本人研究者によると縦長の剥片(石刃)を連続的に剥離する剥片剥離技術はみられず、剥片石器として認定できるものはスクレイパー(削器)のみであり、それ以外は明確な剥片石器はないという¹⁾。そのため、今後はグォム技法の剥片石器製作にかかわる技術的な特徴や編年的位置、ならびに系統問題を追究していくことが必要である

う。

ところで、ベトナム後期旧石器文化の代表ともいうべきソンヴィー文化は、1968年の調査をへて、1971年に考古学院主催の考古学報告会議で正式に検討・討議されたのが嚆矢である。その成果は、*Khao Co Hoc* (『考古学』) 誌上の旧石器時代特集号(11-12号, 1971年)に3本の論攷として掲載された。その論攷の執筆者のひとりであるハ・ヴァン・タン(Ha Van Tan)は、「ソンヴィー文化は後期旧石器文化の可能性がある」と指摘した²⁾。しかし、十分に認知されなかったためか、社会科学院編の *Lich su Viet Nam* (『ベトナム歴史』1971年) 第1巻では、ソンヴィー文化を「旧石器時代末から中石器時代に属する」と位置づけ、記述したのであった³⁾。その後、1976年にタインホア省のコンモーン洞穴で行われた発掘調査時に、ホアビン型やバクソン型の石器群よりも深い層からソンヴィー型の石器群が出土し、この層位的事実から編年的な位置づけが確定し、¹⁴C年代測定成果もあり、後期旧石器時代と認定されたのであった。

本書でも指摘されているように、今後はソンヴィー文化の起源、系統問題、そして様相の異なる石器群との関係の解明が必要となろう。

註

- 1) 栗島義明 2000「いわゆるグォム技法についてーベトナム北部旧石器時代の剥片石器群ー」『大塚初重先生 頌寿記念考古学論集』1009～1034頁, 東京堂出版。
- 2) Ha Van Tan 1971 “Van hoa Son Vi” *Khao Co Hoc* 11-12, 60-69.
- 3) Uy ban khoa hoc xa hoi Viet Nam 1971 *Lich su Viet Nam tap 1*, Nha xuat ban khoa hoc xa hoi.

(きくち せいいち 歴史文化学科)